

第 23 回 全国外洋加盟団体長会議 議事録(案)

開催日：2025 年 9 月 27 日（土）13:00～16:00

会議の場所及び方法：「スマートレンタルスペース」belle 関内 601(6 階)及び WEB 会議 (Zoom)

との併用開催

出席者：(外洋常任委員会)

副会長 船澤泰隆、常務理事 中村和哉、水域理事 井上貴支、水域理事 岩瀬喜貞、
理事 鷹野淳子、顧問 中澤信夫

(外洋加盟団体)

外洋北海道会長 廣田英夫、外洋津軽海峡会長 石川彰、外洋いわき会長 菊池邦仁、
外洋東京湾会長 足立利男、同事務局長 杉浦光之、
外洋三崎会長 石井秀哉、同事務局長 近藤等、

三浦外洋セーリングクラブ会長 飯島洋一、

外洋湘南会長 作田智恵子、同副会長 釜田博久、同事務局長 福島望、
同常任委員 葛川大助、同常任委員 藤本貴志、

外洋駿河湾 遠藤智、外洋東海会長 大島茂樹、同事務局長 坂谷定生、

外洋内海会長 永松馨介、同副会長 森亮介、同事務局長 中川 裕正、

外洋西内海会長 村瀬哲也、同事務局長 小山悟、外洋玄海会長 沼田浩行、

外洋南九州会長 石川国彦、同事務局員 田中葉子、外洋沖縄事務局 徳田恭紀、

(委員会関係)

安全委員会委員長 宮川昌久、

ルール委員会外洋規則小委員長 稲葉俊彦

(特別加盟団体)

油壺特泊監事 鈴木保夫、大阪北港理事 宇都宮則夫、

八重山ヨット倶楽部理事長 深見和壽、同理事 田中隆行、

シーボニアヨットクラブ副理事長 平松隆、東京ヨットクラブ 宮川昌久(前出)、

日本オーシャンセーラー協会代表理事 北田浩、

葉山マリーナヨットクラブ事務局長 清水教男、日本ミニトン協会会長 中村正俊、

日本ミドルボート協会事務局長 白田真人

(事務局)

事務局長 大村雅一、高槻和宏(オブザーバー)

(敬称略)

記録 外洋湘南葛川大助、藤本貴志

外洋東京湾足立会長の進行で 13:00 より船澤副会長の開催の挨拶で開始した。

議事

1. JSAF：役員選定過程及び理事会・評議員会の位置付け改定について

船澤副会長から、以下説明があった。

事前に配布している資料及び YouTube を確認いただき、ご意見があれば、申し出て欲しい。

- ・ 作田：評議員会では、2 年後の採用と聞いていたが、今回急いで改定することに至った、理由は何か。
- ・ 船澤：まだ検討の段階。理事会の人数が多すぎて議論が進まない。また、ガバナンスコードで女性の理事のパーセンテージを求められているが、それを確保するためにも理事の人数が多すぎる。この状態を改善するために必要な改正。今は皆さんにお話を伺うという段階。
- ・ 作田：別途 Web 等で本日の会の出席者に対して説明を聞く機会は作ってもらえるのか？
- ・ 船澤：要望があれば対応する。
- ・ 大村：上記の YouTube には、説明者の理解不足で間違いも多い。今の選挙方法はガバナンスコードに沿ったもの。視聴するときには、注意されたい。
- ・ 坂谷：役員の人数に関して、決定事項か。1 月に決定するのか。外洋団体として改正内容を再度説明してもらいたい。
- ・ 船澤：今回は議論をしていて改正を検討しているという状況をお知らせしたかった。1 月には決定しない場合もある。
- ・ 坂谷：この件は中村副会長から後日改めて説明頂きたい。
- ・ 船澤：この件は中村副会長に伝える。

2. 外洋系各委員会、各水域・外洋系団体からの報告

はじめに、大村事務局長より今回の団体長会議は、従来の案内先である外洋常任委員会、外洋系委員会、外洋加盟団体に加えて外洋系特別加盟団体にも案内したとの説明があった。

配信され、新安全委員長の交代並びに 1 月の団体長会議での安全委員会の検討議案についての説明を委員長の宮川氏からの説明があった。

今回は各委員会、水域、団体からの報告を事前にいただき資料として配布した。資料を事前に確認いただき、この項の最後に質問の時間を設けますが、1 月の団体長会議での持ち帰り案件になっていた OSR の翻訳について安全委員長の交代報告もあわせて、宮川氏から報告させていただく。

2.1 外洋安全委員会から（委員長交代と 1 月案件のその後の説明）

- ・ 安全委員長の交代：平出氏より引継ぎ宮川昌久が就任。
- ・ 宮川外洋安全委員長から、以下報告があった。

① 事故報告

② OSR の改定点（来年から何が変わるか。添付資料参照）

グラブバッグ用に最低出力 5W の手持ち型マリン VHF トランシーバーを用意

し、防水または防水カバー付きでなければならない。使用しないときはグラブバッグに収納すること。コックピットに外部スピーカーを持つ。

クルーメンバーが2人のみのボートの場合、4.07 a) に詳述されたサーチライトは、デッキの下に行くことなくコックピットからアクセスできることが必要。 ストームセールは実際に使えるものではなくてはならない。

③ OSR の翻訳本について（1月の案件のその後の説明）

HP に翻訳版をアップ済み。Web での閲覧は可能。

翻訳本の印刷は費用が高額なので、費用の拠出をどうするか今後協議したい。

2.2 質疑応答

大村事務局長より、報告事項について意見ご質問があるかとの問いに対し、外洋湘南釜田氏より、安全委員会・通信委員会からの救難機器関連の報告資料について補足説明があった。

- ・釜田：資料中「レース参加者の救難機器事前の情報収集」ならびに「第三管区域のオフショアレースは海上保安本部 運用指令センター」への情報提供協力は、昨年パールレースで発生した PLB 誤発信に伴う対応策。PLB の登録先が総務省のために海上保安庁との連携がリアルタイムでなく情報共有に時間を要するために求められた協力体制。当初は全国展開を求められたが、最終的に第3管区だけで良いということで落ち着いた。

今年のパールレースに対し、海上保安庁第三管区から実行委員会へ、参加者の保有する救難信号機器の情報収集並びに「救難信号機器」の取扱いと誤発信時の対応について、事前の参加者への通知について確認があった。前者については、運営指令センターではなく交通部 安全対策課へ報告するよう指示を受けた。パールレースの PLB 所持者は19艇38名であった。

後者については、文書「パールレース参加者のみなさまへ」での通知のほか、レース前日の艇長会議で実行委員長が説明した。

2.3 外洋艇登録事務局長の辞任と今後について

- ・大村事務局長から以下説明があった。

1名候補者がいたが辞退されたため、現在、次の候補者を選定中。
当面（年内めど）は三浦外洋セーリングクラブの事務局長で対応する。
登録処理が遅れることもあるがご了承ください。
- ・作田湘南会長より、事務局経験者が即戦力、出席者に立候補を募ったが挙手はなかった。当面協力してすすめていく。

各事務局に対して、自分の団体の会員登録、艇登録はそれぞれの団体でできるようにし、外洋艇登録事務局の仕事の軽減を図りたいとの意見があった。
- ・足立東京湾会長：加盟団体でできるところは行って協力していく必要がある。

3. 関東4団体長提案議題： 関東4団体長

3.1 外洋艇推進グループにおける外洋団体長会議と常任委員会の関係性についての確認

進行役：外洋湘南作田会長

多くの団体、常任委員会メンバーが内規を『認知』していないということがわかり、また、この会も最近は報告事項で終始していることが多くせっかく皆で集まれる機会なので、原点に戻り会の意義を考えての提案となった。

成り立ちと内規の説明を外洋推進グループ立ち上げ時の常務理事である坂谷参与をお願いしたい。

これを受けて、坂谷参与から、内規の確認、及び体制・役割について、当時の経緯、外洋団体の発足趣旨、内規の第3条、8条について、説明があった。

発足の経緯、主旨：当時 JSAF 内には外洋推進グループがあり、この中に外洋常任、外洋計測、外洋安全がありそれぞれ活動していたが、当時レース、ルール、国際等の外洋小委員会はなく、まとまった外洋独自の活動も無かった。当時外洋をまとめる規則もなかったので、植松副会長からの外洋組織の強化、一体化を進める方針中で今の形が作られ、その時内規を作り今の形になった。外洋のことは外洋で決めていこうという趣旨。JSAF 本体には外洋常任委員会を立ち上げていただき、外洋団体長会議と外洋常任委員会で外洋を考えていこうということで調整した。

その後 JSAF の委員会の中に包含されていた、ルール、国際、レース各委員会について、JSAF 理事会の中で設置要望活動をし、定款に外洋艇推進グループ内の組織として各々の外洋小委員会が明記されるに至った。

外洋常任委員会が外洋団体長会議、各外洋加盟団体の意見を十分吸い上げて、外洋常任委員会を通して JSAF に伝えていくという形を作った。

内規第3条：団体長会議はグループにおける最高意思決定機関である

内規第8条：団体長会議が年2回の開催に限られることからグループ内に外洋常任委員会を置く

説明後、以下についてディスカッション

- ・ 玄海 沼田：クラブレースでは20艇程度の集まりがあるが、JSAFでは、5艇程度の集まりしかない状況である。今後の運営が心配である。
- ・ 南九州 石川：錦江湾で活動しており、外部からの艇の参加が難しい状況である。
- ・ 中部 岩瀬：JSAFは、競技団体であり、活動の趣旨が外洋とは違っている。常任委員会の半数は、決裁事項の半分は、一般会員の参加でオープンにしていけないのかと感じている。現場に声を届けたい。
- ・ 東京湾 杉浦：会議でしか接点がないような状況であり、外洋常任委員会とのかかわりは薄い。
- ・ 三浦 飯島：会議での接点だけであり、事務局で処理していることが多く、会としてのキャッチボールはあまりない状況である。

- ・湘南 釜田：外洋湘南メンバーも委員会への参加は行っているのかかわりは有る。内規を初めて確認した。委員会とのコミュニケーションも増やしたいと感じた。外洋推進グループの組織図が、古いままで担当者の把握ができない、速やかに現在の組織図のアップを望む。関係性が薄いので、今後は連携を密にしていければと考えている。
- ・津軽海峡 石川：各団体からの J S A F への要望はあまりない。J S A F の理事が多いとの話があったが、自分も会議に出席していて、同様に感じているところがある。
- ・北海道 廣田：小樽を中心に活動。J S A F への要望はあまりない。
- ・いわき 菊池：震災から 10 数年経過しているが、ヨットが集まらず活動していない。常任委員会の報告もただ聞いているという状況。
- ・東海 岩瀬：現場には会議の内容が届かない。水域理事にも限界がある。会議もオープンにして現場に直に伝えるということを考えていくのが良いのではないかな。
- ・内海 永松：報告事項は受けるがあまり意見を言うことがない。若い者が入りやすい状況やフランクに話し合えるような仕組み、体制の変更が必要と感じている。
- ・沖縄 徳田：レースを行うのに J S A F に加入が必要であるために加入している。楽しいレースを運営していく上で J S A F のルールに基づいて運営している。
- ・湘南 作田：皆さんからのお話を伺い、今後の活動のためにも双方向の情報共有、連携が必要であると感じた。

もう一つの案件、この会議の配信先だが、当初外洋団体長会議の案内先は、内規にあるように外洋加盟団体長への案内だったが、必要に応じていろいろな団体に案内しご意見をいただくということで 28 特別加盟団体長会議へのご参加の案内を出した。ここ数年外洋系特別加盟団体にも案内されている。その理由は外洋加盟団体以外の外洋系団体からも広く意見をいただきたいという趣旨と聞いている。今後も案内していくのかどうかについて、検討していくことと思うが、案内を始めた時の事務局長であった鈴木さんにその経緯をお話いただきたいと思う。

それに対し鈴木氏より以下説明があった。

- ・油壺 鈴木：会議の記録は全てアップされているが、外洋団体と常任委員会の繋がりが薄い。なぜなら今は外洋団体長がメンバーに入っていない。水域理事も外洋団体と関係が薄い。団体から意思をもって情報を取りにいかないと繋がりが薄くなる。理事の数が多いのは、ヨット協会と NORC との合併において、加盟団体を増やして理事の数を増やした経緯がある。半数は外洋系の理事がいるが、関係が希薄であるのならば、今後外洋団体の意見要望を J S A F にどのように反映させていくかが課題。そのためには広く外洋団体からの意見を聞くことが大事。なので、加盟団体に限らず広く外洋系団体に参加してもらうことが良いと考えた。

ディスカッション後に、進行役作田会長から、以下課題提起があった。

今回内規の確認、共有ができた。今回のディスカッションは何かを決めるということではなく、今後の外洋加盟団体、外洋団体長会議のあり方、外洋常任委員会、外洋の各委

員会との関係性について継続して話し合っていきたいと考えている。外洋セーラーのためにどうあるべきか、外洋は一つになり艇登録管理も自分たちで行っていく必要があるのではないか。

今後理事会の形も変われば外洋常任委員会も変化し、内規に変更も出てくることと思う。その時は外洋常任委員会にお任せではなく外洋団体からも積極的にかかわっていききたい。1月にはどうなるか判明していると思うので、次回1月の継続審議にしたい。これに対し異論はなかった。

3.2 外洋系加盟団体の5年後/10年後

進行役：三浦外洋セーリングクラブ飯島会長

昨年の鹿児島会議でも外洋団体の将来展望について意見交換を行ったが、お話しいただく内容は重複でも構わない。昨年も団体の事務局運営の厳しさ等もご意見があったと記憶している、外洋が一つにまとまる等のご意見もあろうかと思う。また、先ほど大村事務局長からも当面の外洋艇登録事務局についてのお話をいただいたが、外洋団体の要でもある外洋艇登録につても忌憚のないご意見等伺えたらと思う。

まずは自身の団体についてお話させていただく。

- ・三浦 飯島：現在 231 名 88 艇の登録がある。湘南、三崎も多いと聞いている。
今後の構成についてクラブで話をしている。決算については、均衡を保っているが、固定費があるので、会員数が減ると予算が減る。10 年後には2割程ヨットをやるような年齢層（40～50 歳代）が減る統計が出ていることもあり、ヨット人口が減る状況下でクラブとしてどうやって存続させるか議論している。
- ・津軽海峡 石川：函館を担当している。高齢化が進んでいるがレース回数は保持している。年5～6回10艇程度。若い年齢層が入ってこない状況である。他の水域でのレースへのチャーター艇での参加を試みている。（小樽や室蘭青森などへ）。地元から出て、レースへの参加を行っている。
- ・東海 大島：今後は厳しいと感じている。伊勢湾の中に自主管理のクラブがあり、マリーナは4つしかない。クラブは15団体ある。高齢化が進んでいる。60～70 歳代の者が多い。
高齢のため船を売却したいといっているメンバーもいる。クルーの募集のために毎週体験乗船を行っているが（2年間）成果は2名。しかも、いい時にしか来ない。今いるメンバーで楽しんでいれば、それを見て新しいメンバーが加入するのではないかというような思いで活動している。
いい案があればうかがいたい。自分がどれだけ楽しめるかである。
- ・玄海 沼田：外洋艇登録が激減している。ローカルレースでは登録の必要がないので、艇登録をしない船が多くなっている。人数が少なくていい、島回りレースばかりになっている。ローカルレースばかりの参加が多い状況である。博多ヨットクラブとの共催など行っているが、月に何度もメンバーが集まらないので、結果、安易な島周りのレースばかりになっている。ブイ周りは、人数が必要なので参加が少ない。

ルール、安全、計測について、外洋常任委員会が地方に来て講習会を行ってもらえると、より安全なヨットライフを送れる。

外洋玄海がなくなる危機に瀕した時、福岡ヨットクラブで引き受けたが、今後維持は難しいかもしれない。

- ・南九州 石川：ポンツーンがなく、高齢化しているので、船にのることが困難になっている。13艇40数名の会員。月に1回はレースを行っている。島周りや、ブイ周りを行っている。レースを行っている若い者が集まるので、若い者に繋げていきたいのでレースを開催している。
- ・沖縄 徳田：自分一人で運営している。座間味レースがメイン。来年は伊江島レース開催予定。楽しいレースをもっとやれば人は集まるので、今後運営に携わってもらえる仲間を増やしたい。島周りのレースがメインである。
- ・西内海 村瀬会長：広島は、100人程度の会員、高齢化で運営に困っている。県連や、大学、学生と連携してレースを行っている。普及が課題であり、余っている船をマリーナと協力して活用している。インスタで募集を行い、試乗会を行っている。OPのメンバーにもクルーザーにのってもらえるようにしている。
- ・内海 永松：コロナ後に130名、My Sailing導入後に71名になった。楽しいレースに参加が多く、グランプリレースは参加が少なくなっている。楽しいことをすれば参加が増えると考えている。動いていない船をうまく使えるシステムなど若いセーラーをキールボートに引っ張る仕組みがあると活動がふえるのではないかな。
関東のレースでチャーターできる仕組みあれば参加するオーナーも増えると思う。
- ・いわき菊池：震災以来、登録艇は1艇と数名の会員のみである。ジュニアのコーチや県連に参加したりしている。いわきでのレースはできていない。高校生や大学生などの若い世代がクルーザーに乗ってもらえるシステムがあるといい。
- ・北海道 廣田：マリーナがクルーザー教室を開催している。オーナーを育てる目的で運営しており、卒業生がレースにも参加してもらっている。若い世代が多い。
今後40-50歳代が増えることに期待する。

進行役三浦飯島会長

人を引き付ける運営を行っているところが、参加人数が多いことがわかった。

会員は、JSAF、加盟団体、クラブ等いくつかの団体のメンバーになるため会費の負担が大きい状況である。レースによってはレースフィーにも差をつけているが、外洋団体の存在意義の理由を聞かれる事もあるが明確な回答ができなかった。

(外洋団体は余計なレイヤーだ、という意見もある)

これを受けて以下の意見が出された。

- ・外洋湘南 釜田：自身は逗子マリーナヨットクラブ会員だが、クラブ会員の中には、外洋団体に会費を払うことに抵抗がある者が多い。会費の件もあり、外洋団体の意義に疑問が出てきている。JSAFの登録は、My Sailingから自分で登録できるので、

外洋団体が介入しなくてもよくなっている。そのため存在意義が薄れているのではないか。外洋湘南では、外洋レースもクラブ主体で運営を行っている状況からすると外洋団体の意義の再検討が必要な時期にきているのではないか。クラブの無い地域もあり水域によって状況は違うと思うが、またすぐには結論がでないが、外洋湘南としては今後の検討課題と考えている。

- ・油壺 鈴木：若い者の加入については、現場のクラブの仕事ではないか。J S A Fのメインはオリンピックであろうと思う。加盟団体は役割が終わったのではないかという考えもあるかと思うが、外洋団体はクラブとJ S A Fとのパイプ役になっても良いのではないかという考え方もある。艇登録事務局は、前より仕事が増えているので、外洋系で守る。艇の管理ができなければ消滅する。外洋艇の管理は外洋で管理してもらいたい。関東4団体は当時2000人、現在は1000人。できるところは統合が一つの道ではないか。
- ・東京湾 足立：会員の減少は、高齢化やヨット人口の減少が原因だと思う。参加費の値上げ等で採算が取れるように運営は行っているが、連盟や団体との接点を見据えて運営を行っていききたい。レースは行っているがJ S A Fに加入している者が少ない。一般のレース参加者はJ S A F加入の必要はないと思う人が多いので、会員を引き付けることを考えていかなければいけないと思う。J S A Fと外洋はしっかり紐づいていかなければいけないと考えている。
- ・船澤副会長：外洋の専門委員会は、このメンバーから集めないといけないと考えている。
外洋団体の役割が見えてこない。存在意義がわからない。なので、会員が減少していく要因になっているのではないか。水域の調整役であれば、水域から人を出すべきであるし、一つの加盟団体と同等であるならばそのような運営が必要であろうし、考えていかななくてはならない。
普及活動が必要だと思う。運営費もひっ迫しているので今後は、普及に力を入れたい。水域のみなさんの協力が必要で主体はヨットクラブの皆さんが必要であると考えている。
- ・湘南作田：過去委員会に対して加盟団体から委員を出していたこともあるので、今後とも委員会から加盟団体に対して人を出すような要望を出してほしい。
- ・船澤副会長：お互いの関係性を深めていく必要がある。

4. その他

- ・東京湾の足立会長から、各団体からの報告事項があれば、お願いしたいとの発言があった。

5. 閉会 16:00

東京湾の足立会長から、将来に向けた議論ができたと思う。時間も限られているので今回はこれで閉会とする。

次回開催は1月25日(日)東京での開催となり、引き続き、受付、当日の会議の準備、議

事録等関東外洋 4 団体でお手伝いさせていただきたいと思います。

では、これをもって本日の外洋団体長会議を閉会とさせていただきます。

終了後、事務局会議に移った。